



発行：オープンアクセスリポジトリ推進協会
jpcoar@nii.ac.jp

《 IN THIS ISSUE 》

- ・特集：次期JAIRO Cloud (WEKO3) 本番移行Q&A！
- ・報告：JPCOAR Mondayを開催しました／第22回 図書館総合展へ出展しました
- ・座談会 「機関リポジトリはどこへ向かうのか？」



特集：次期JAIRO Cloud (WEKO3) 本番移行Q&A！

この特集では、みなさんが気になっている次期JAIRO Cloudについて各担当者から解説いたします。次期JAIRO Cloudがよく分からないと思っている方や新しくリポジトリ担当になって困っている方も、これを読めば次期JAIRO Cloudをもっと詳しく知ることができます。

① なぜ新しいシステムに変更するのですか？

世界的なオープンサイエンスの潮流を背景に、日本国内の研究データを含む学術情報の流通基盤を実現するためです。文献リポジトリとして長年の実績を持つ現行JAIRO Cloud (WEKO2) の機能性を受け継ぎつつ、研究データやデジタルアーカイブのような大容量データの公開への対応を行うとともに、迅速な開発成果の適用とクラウドサービスとしての安定性および持続可能性の両立を目指し、ベースとなるシステムから根本的に見直して新しいシステムを開発しています。

② 何が変わるんですか？ 逆に変わらないものは何ですか？

次期JAIRO Cloud (WEKO3) では、現行JAIRO Cloud (WEKO2) の基本機能—アイテムタイプ、インデックス、モジュール（次期JCではウィジェットと呼びます）等—は踏襲しており、全体的な使用感は大きく変わりませんが、管理系機能は管理画面に集約してナビゲーションを向上しています。その他の主な変更点としては、以下があります。

・ ベースシステムの変更：現行JAIRO Cloud (WEKO2) ではNetCommons2がベースになっていますが、次期JAIRO Cloud (WEKO3) では欧州原子核研究機構 (CERN) の開発したInvenioという全く別のシステムがベースになっています。

・ メタデータスキーマの変更：現行JAIRO Cloud (WEKO2) では「junii2」を採用していましたが、次期JAIRO Cloud (WEKO3) では「JPCOARスキーマ」という階層構造を持ったメタデータスキーマを採用しています。これによって、特に著者名等、アイテムメタデータの入力画面がかなり複雑になったという印象を持たれるかもしれませんが、JPCOARスキーマではjunii2よりもリッチ（高品質）なメタデータの記述が可能になっていますので、徐々に慣れていただければと思います（⑦もご覧ください。）。

・ アイテムの一括登録方法の変更：現行JAIRO Cloud (WEKO2) ではSWORD Client for WEKO (SCfW) という外付けのアプリケーションを提供していますが、次期JAIRO Cloud (WEKO3) ではTSVファイルおよびコンテンツファイルをブラウザから直接アップロードして登録する方法に変更します。

・ アイテムのバージョン管理機能の追加

・ レスポンシブウェブデザインの採用 (モバイル専用サイトの廃止)

・ ページの多言語対応：現行JAIRO Cloud (WEKO2) では言語 (日本語・英語) 毎にページレイアウトを設定する必要がありましたが、次期JAIRO Cloud (WEKO3) では同一のページレイアウトとなります。

・ 一部の利用頻度の低いモジュールの廃止

③ 大まかなスケジュールを教えてください。

2020年度内はごく一部の機能について「先行移行」を行います。以下の順番で進んでいく予定です。

1

現行JAIRO Cloud (WEKO2) のIRDBハーベスト停止

2

現行JAIRO Cloud (WEKO2) の更新停止

3

次期JAIRO Cloud (WEKO3) 確認期間

4

JAIRO Cloud切替期間：
現行JAIRO Cloud (WEKO2) の閉鎖、次期JAIRO Cloud (WEKO3) の公開

5

次期JAIRO Cloud (WEKO3) のIRDBハーベスト再開

・ 参考：次期JAIRO Cloud (WEKO3) 先行移行 資料 <http://id.nii.ac.jp/1458/00000554/>

その後、2021年度前半に残りの機能の移行を3グループに分けて行う予定です。本番移行開始前に、本番移行に関するドキュメント (スケジュール、データ移行仕様、確認チェックリスト等) を提供予定です。詳細なスケジュールは現在調整中です。

・ 参考：2020年11月公開の本番移行スケジュール (延期になったため、あくまでイメージとしてご参照ください)
<http://id.nii.ac.jp/1458/00000245/>

④ データの移行はどうするんですか？

JAIRO Cloudには、アイテム、アイテムタイプ、インデックス、サイトデザイン（モジュールやページレイアウト）、ユーザアカウント、各種設定情報、アクセス統計などさまざまなデータが含まれています。現行JAIRO Cloud (WEKO2) から次期JAIRO Cloud (WEKO3) へのデータ移行は、JPCOARスキーマにあわせたアイテムメタデータへの変換も含めて、基本的に国立情報学研究所で開発したデータ移行ツールによって一括で行います。データ移行の仕様については本番移行前に資料をご提供いたします。ただし、データ移行ツールは全利用機関に共通して適用されるため、個別の事情に配慮したきめ細かい移行が難しい部分もあり（特にアイテム（タイプ）やサイトデザイン）、前述の「確認期間」や移行完了後に利用機関の皆さまにご調整をお願いします。

⑤ 利用機関はどのような準備が必要ですか？（事前・移行期間中・事後）

事前

必要に応じ、停止期間（「JAIRO Cloud切替期間」は閲覧もできなくなります）や、リニューアルの広報をお願いします。移行期間前の事前準備として、現行JAIRO Cloud (WEKO2) の設定（junii2マッピング設定等）に変更が必要になる場合があります。事前に提供される本番移行に関するドキュメントで、必ず移行仕様を確認していただくようお願いします。

移行
期間中

「JAIRO Cloud (WEKO3) 確認期間」中に、移行時の確認チェックリスト（提供予定）に基づき確認作業をお願いします。また、移行に関する動画コンテンツもあわせてご覧ください。特に、利用者の閲覧に支障がないか（デザインやリンク切れなど）、アイテム（タイプ）がマッピング仕様に基づいて正しく移行されているかの確認をお願いします。

事後

JAIRO Cloud (WEKO2) 更新停止後に登録依頼のあったアイテムを登録します。なお、次期JAIRO Cloud (WEKO3) ではJPCOARスキーマに準拠したデータ構造となり、より豊富で詳細なメタデータを記述できるようになりました。移行を機に各機関で表示させたいメタデータを検討し、必要に応じて移行されたアイテムのメタデータ整備を行っていただいてもよいかもしれません。

⑥ WEKO3やWEKO2の勉強のためには何を读んだらいいですか？

本番移行時に公開されるドキュメント類は必ずお読みください。

●WEKO3やJPCOARスキーマの最新情報は以下のページから確認できます。

- ・JAIRO Cloud (WEKO3) サポート <https://meatwiki.nii.ac.jp/confluence/display/JAIROCloudWEKO3>
- ・JPCOARスキーマ <https://schema.irdb.nii.ac.jp/ja/>

※JPCOARスキーマと比較のため、現行のjunii2のガイドライン等を参照すると、より理解が深まると思われます。

- ・メタデータ・フォーマット junii2 <https://www.nii.ac.jp/irp/archive/system/junii2.html>

●外部連携に関しては、IRDBハーベスト仕様が参考になります。

・IRDBサポート > ハーベスト仕様 <https://support.irdb.nii.ac.jp/ja/harvest>

●WEKO2を含むリポジトリ実務全般については、過去の研修・セミナーの資料もご参照ください。

・オープンアクセス新任研修

A.学術コミュニケーションの基礎知識 <http://id.nii.ac.jp/1458/00000240/>

B.機関リポジトリの管理 <http://id.nii.ac.jp/1458/00000538/>

C.機関リポジトリの著作権とケーススタディ <http://id.nii.ac.jp/1458/00000539/>

・JPCOAR Monday https://jpcoar.repo.nii.ac.jp/?action=repository_opensearch&index_id=102 (2021/03/24まで)
https://jpcoar.repo.nii.ac.jp/search?search_type=2&q=102 (2021/03/24から)

※WEKO3への移行・公開に伴い時期によりURLが異なりますのでご注意ください。

⑦ WEKO3に採用される予定の「JPCOARスキーマ」とはどのようなものですか？

JPCOARスキーマは、junii2に同じく、機関リポジトリ等のメタデータを入力するルールや語彙を定義したものです。

従来用いていたjunii2に比べ、アクセス権やAPC等新たな要素の入力に対応し、多くの項目で識別子の入力が可能となりました。著者や所属機関については、同一著者・機関の多様な情報をセットにして流通させることができます。国際標準とされるメタデータスキーマを元に設計しているため、IRDB（学術機関リポジトリデータベース）を経由し、登録コンテンツを広く流通させることができます。

[ガイドラインのウェブサイト](#)では、具体例とともに詳しく内容を確認できます。わからないこと、困ったことについて、専用フォームからのお問い合わせが可能です。

JPCOARスキーマの特徴については、こちらの資料をご参照ください。

・2020.10.26 学術コミュニケーション技術セミナー（JPCOAR Monday）

リポジトリ周辺技術解説(1) JPCOARスキーマ <http://id.nii.ac.jp/1458/00000542/>

⑧ 不安です。分からないことがあったら質問はできますか？

JPCOARではJAIRO Cloudの運用について情報共有のメーリングリスト（ML）を設けています。お困りのことや不明な点など、ぜひMLで共有してください。MLは会員機関の相互協力で成り立っています。他機関からの質問などにも可能な範囲でご協力ください。直接的な答えでなくても、それぞれの機関の状況を共有していただけるだけでもサポートになります！

オープンアクセス・オープンサイエンス全般など、より幅広い話題を扱うMLも設けていますので、そちらもぜひご参加ください。MLへの参加はJPCOAR ウェブサイトのロゴ画像が目印です。

【回答担当者】

Q①～④：国立情報学研究所

Q⑤～⑦：JPCOARコンテンツ流通促進作業部会

Q⑧：JPCOARコミュニティ強化・支援作業部会



報告：JPCOAR Mondayを開催しました

JPCOARでは、10月から12月にかけて「JPCOAR Monday」を開催しました。このセミナーは「A:オープンアクセス及び機関リポジトリ周辺技術解説」「B:デジタル・アーカイブ周辺技術解説」「C:電子ジャーナル・データベース周辺技術解説」「D:著者名・機関識別子、検索サービス周辺技術解説」の4回に分けて開催されました。585名から申込があり、参加人数はA:293名、B:312名、C:360名、D:314名となりました。今回はこのセミナーを企画した杉田運営委員と参加者3名の方に報告をしていただきます。

JPCOAR Mondayとは？

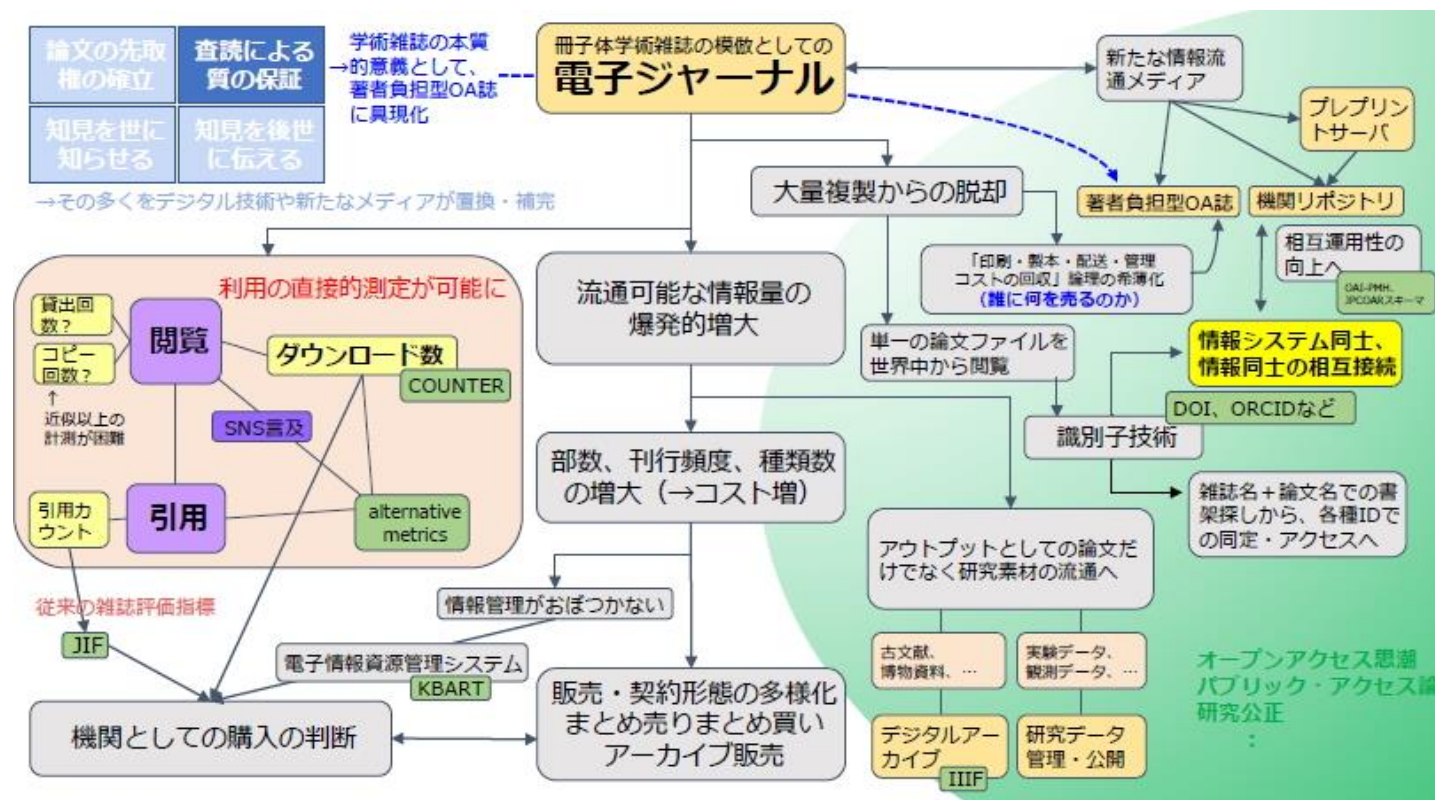
学術コミュニケーション技術セミナー「JPCOAR Monday」は、協会設立当初から毎年開催している新任担当者研修とは別の、新たなライトな研鑽機会として今年度はじめて実施したものです。機関リポジトリ業務やオープンアクセスという話題は、学術コミュニケーションのさまざまな技術的動向・社会的動向に密接に関連しています。また一方、各大学でそうした業務に携わる職員も、機関リポジトリ専任というケースは少なく、電子ジャーナルの契約であったり、図書館の利用者サービスであったり、いろいろな業務を兼務している方が多いものと思われます。

このセミナーは、機関リポジトリの運営という仕事と直接・間接につながっているさまざまな技術をできるだけ幅広く取り上げ、薄くとも広く周辺の知識を得られる場になればと企画しました。

学術コミュニケーションの見取り図

新型コロナウイルス感染症の拡大の影響でオンライン開催となりましたが、当初はJPCOAR Monday 4回分の内容をまとめて、集合形式で2日間で開催するという企画でした。後半にグループワークを予定していました。グループワークのテーマは、この2日間で取り上げたさまざまな要素技術や話題をとりまとめ、現代の学術コミュニケーションの見取り図を描いてみましょう というものでした。

残念ながら集合開催が困難な見通しとなり、ではもしもそのグループワークに自分が参加したらどんな絵を書いたのだろうかということで作成してみたのが下の図です。JPCOAR Mondayに参加くださったみなさまにも、ぜひ各自の見取り図を考えてみていただければと思います。また、今回のセミナーで取り上げなかった研究評価の圧力の存在や粗悪学術誌(Predatory Journal)の問題などが、どこに位置し、他の何につながっているのかを考えてみるのも頭の体操になるでしょう。



今後の研修について

JPCOAR Mondayへの多くのご参加ありがとうございました。人材育成作業部会では来年度以降も会員館のみなさまの役に立つような新たな研修等の企画を考えてまいります。引き続きご期待ください。また、希望する研修テーマがありましたら、JPCOAR人材育成作業部会までご連絡ください。

杉田 茂樹 (JPCOAR運営委員・人材育成作業部会主査)

報告：JPCOAR Mondayを開催しました

参加報告

IIIF、研究データリポジトリ、Altmetricsなどに興味があり、今回の講座を受講しました。基礎的な内容から順に説明していただいたので、分かりやすく、特に実例紹介は参考になりました。ResourceSyncやIIIFならではの資料活用法など新しい内容についても学ぶことができ、また、「名前は聞いたことがあるけど、よく知らない…」そんな用語についても、解説を聞くことで復習・再確認することができました。ただ、受講中は説明を聞いて内容を理解できたと思ったものの、知識の定着には至っておらず、まだまだ復習を繰り返すことが必要だと感じています。

今回のセミナーは複数回に分けたオンライン形式による開催ということで、参加の機会が広がり、当館からも普段以上の人数が参加できました。コロナ禍で移動を始め様々な制限がかかる中、このような研修の機会を与えていただき、感謝しています。

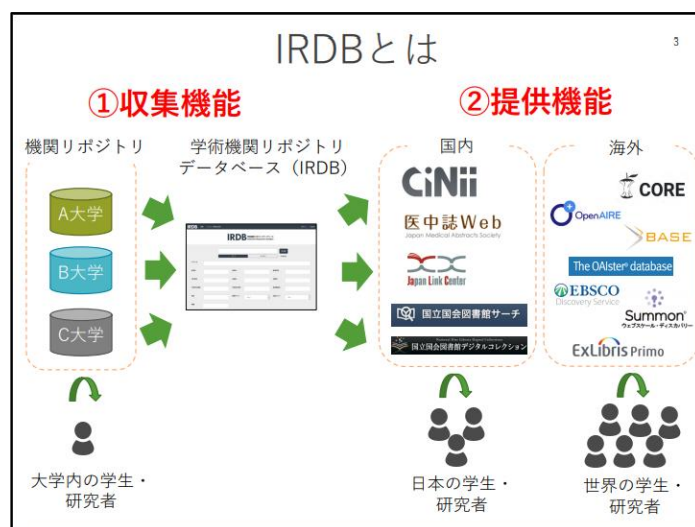
(徳島大学 亀岡 由佳)

2020年11月16日(月)に開催された学術コミュニケーション技術セミナー(JPCOAR Monday)「C.電子ジャーナル・データベース周辺技術解説」では、3名の講師による講演がオンラインで行われました。

COUNTERやAltmetricsに関する知識は、利用者がどのような電子リソースを、多様な研究行動の中で利用しているかを、図書館職員が理解するための重要な情報であり、これらの情報を分析することで、電子リソースを購読するためのエビデンスとして活用ができます。更に、KBART/ERDB-JP/ODIに関する知識は、図書館が自館の電子リソースのタイトルリストやライセンス情報を適切に管理し、検索サービスなどを通して利用者に提供するために活用ができます。

新型コロナウイルス下において、遠隔講義等の実施により、改めて電子リソースの提供・活用の重要性が認識されました。今後も、図書館には利用者が必要とする電子リソースの拡充とともに、利用者に対するウェブ上での的確なナビゲートが期待されると思います。今回のイベントで紹介された内容は、図書館が制限のある中でそのパフォーマンスを最大限発揮するためのツールとして活用できるものと考えています。

(電気通信大学 上野 友稔)



図：片岡 朋子(2020) リポジトリ周辺技術解説(2) [OAI-PMH, ResourceSync, IRDBからの連携]
<http://id.nii.ac.jp/1458/00000543/>

私は2020年4月から機関リポジトリに携わっています。JPCOAR Mondayでは、広い意味でのオープンアクセスに関わる様々な技術が紹介されており、いずれも興味深い内容でした。その中でも特に片岡朋子氏(お茶の水女子大学)の「OAI-PMH, ResourceSync, IRDB連携」についての発表が印象に残りました。機関リポジトリに登録されたデータがIRDBにハーベストされていることは漠然と知っていましたが、追加や削除されたデータが反映される実際の仕組みや、OAI-PMH後継規格のResourceSyncについては、本セミナーで初めて知ることができました。特にResourceSyncについては、リポジトリ側から更新を通知することで、反映までに生じてしまうタイムラグを減らせることに魅力を感じました。

普段の業務では意識することはありませんでしたが、機関リポジトリに登録されたデータがその後どのように流通していくのか、広い視野を獲得することができたセミナーだったと思います。

(琉球大学 與那覇 政輝)

JPCOAR Mondayの資料は下記からご覧いただけます。

https://jpcoar.repo.nii.ac.jp/?action=repository_opensearch&index_id=102 (2021/03/24まで)

https://jpcoar.repo.nii.ac.jp/search?search_type=2&q=102
 (2021/03/24から)



報告：第22回 図書館総合展へ出展しました

2020年11月4日に開催された第22回図書館総合展は、史上初となるオンライン開催となりました。今年度はCOVID-19の影響で様々な活動に影響が及びましたが、教育研究活動においてはDX（デジタル・トランスフォーメーション）が話題となっています。このような時勢を考慮し、今年度は「いまこそオープン JPCOAR2020」と題し、作業部会の活動報告と会員館の事例報告を中心に、オープンアクセス・オープンサイエンスの動向を紹介しました。

委員長の開会挨拶・趣旨説明では、JPCOARが発表した「COVID-19以降の社会に向けたオープンアクセスの加速について」の概要が説明されました。DXの事例として、例年対面で行ってきた研修をオンライン開催したところ、200名～300名ほどの参加があり、「リアル開催より参加しやすく良い」、「これからもオンラインで開催してほしい」との感想が寄せられたことも紹介されました。

研究データ作業部会は、研究データ管理教材の開発状況について報告しました。研究データ管理はオープンサイエンスの潮流の中でますます要求されるようになってきており、JPCOARでは研究データ管理の支援者としての目線から、大学院生や若手研究者をターゲットとしたトレーニングツールを作成しています。コミュニティ強化・支援作業部会は、JPCOARのコミュニティとしての活動を強化するための取組みを報告しました。その1つとして、2020年12月から会員機関が相互に情報提供するためのメーリングリストの運用を開始しています※1。コンテンツ流通促進作業部会は、グリーンOA推進に効果的な活動の特定のための調査、著者の名寄せワークフローについての紹介やCiNii Researchの構築に向けた取組みを報告しました。

会員館の事例報告では、廣田政則氏（酪農学園大学）から、researchmap連携とリポジトリ業務の外部委託による業務負荷を軽減する工夫が紹介されました。村上史歩氏（京都大学）からは、グリーンOA推進のための取り組みとして、OA方針説明会を行っていることや、

researchmap等の学内外のシステムと連携したりポジトリ登録システムの事例が紹介され、課題として共著者の合意を得ることや業績評価への貢献、今後の研究データ登録の推進が挙げられました。

これらの発表の大部分はJPCOAR Webサイトで公開しております。気になるトピックがあればぜひ、アクセスしてご覧ください。

いまこそオープン JPCOAR2020

日時：2020年11月4日（水）

会場：オンライン開催

https://jpcoar.repo.nii.ac.jp/index.php?page_id=152 ※2
<https://jpcoar.repo.nii.ac.jp/page/152> ※3

- ※1 詳細は本紙15ページを参照ください。
- ※2 2021/03/24まで
- ※3 2021/03/24から

オンライン開催ごぼれ話

オンライン開催の環境としては、Webexを利用し、ホスト管理を業務委託しました。当日は司会1名、質疑担当2名、バックアップ3名という体制で運営しました。質疑はWebexのチャット機能を利用し、質疑担当がチャットの投稿を整理した上で、発表者・スタッフ間で共有しました。資料の公開場所の通知やアンケートの依頼等の事務連絡については、バックアップスタッフが担当し、同様にチャット機能を利用しました。参加者はログイン後のチャットしか表示されないで、事務連絡は定期的に発信しました。オンライン開催においては、発表者を含め全ての関係者は一か所に集合する機会がありません。関係者は事前に接続テストなどのリハーサルを実施し、本番に臨みました。

初めてのオンライン開催でしたので、行き届かない点もあったかもしれませんが、大きな問題なく終了することができたと思います。なお、今回の参加者は231名でした。アンケートの結果、オンライン開催に概ね好評をいただいたので、今後に生かしたいと考えています。

（JPCOARコミュニティ強化・支援作業部会）



Open Access 論文紀行

J P C O A R
オープンアクセスリポジトリ推進協会

Vol.8：映画

国内の大学や研究機関、助成機関では、様々な調査研究の文献を「機関リポジトリ」等のウェブサイト
で公開しています。その中から毎回テーマを決めて、専門家の方以外にも親しみやすい日本語文献を紹介
します！ CiNii Articles であなたも楽しそうな文献を見つけてみませんか？



機関リポジトリに登録された、映画に関
する本文へのアクセス可能なコンテンツ
より検索しました。

IRDBの検索条件

検索語：映画 / シネマ / ムービー / 銀幕
本文あり

鉄道線と銀幕の風景：ゴジラの足跡を辿る東京
1954年（新潟大学）

時代による女性表現の変化—映画のリメイク作
品の字幕比較—（金沢大学）

ホラー映画における「驚愕」のタイプ論：『イ
ンシディアス』における「驚愕」シーンの分析
を中心として（立命館大学）

映画館における有人窓口と自動券売機でのチ
ケット購買行動：年齢層別の直接観察（関西大
学）

映画「私の中のあなた」から考える
終末期小児がんの子どもと家
族がより良く生きるための支援
（岡山大学）

ドイツ映画賞作品史（2）——移
民の背景を持つ者（2010年代）
——（広島修道大学）

留学生と観る日本シネマ（長崎大
学）

編集こそが映画であるような手法
——3つのパレエ・ドキュメンタ
リーにおける「現実」と「創造
性」——（西南学院大学）

日本語映画の中国語字幕翻訳にお
ける文字制限をめぐる：短編映
画『恋する河童』を例に（福岡
大学）



ベルクソン自身が映画について語ったこと：
「アンリ・ベルクソンと庭いじりながら」
翻訳と解説（北海学園大学）

「聞き続ける」という挑戦：映画『ハッピーア
ワー』の制作過程に関する一考察（宮城学院
女子大学）

ディズニー映画『ベイマックス』における医
療的介入 — カウンセリング場面などについ
ての医学的検証 —（茨城大学）

『となりのトトロ』と考古学（尚美学園大
学）

「実話にもとづく映画」で描写されるマスメ
ディアの現実と矛盾：イラク戦争開戦時を描
いた『Shock And Awe』『VICE』を中心に
（淑徳大学）

コンテンツの成功要因：映画のケース（大妻
女子大学）

映画『007』シリーズを題材とした異文化理
解教育の実践例（湘北短期大学）

映画館での映画鑑賞による高齢者心理及び自
律神経活動への影響について（山梨県立大
学）

転がり草のゆくえ：『トイ・ストーリー4』
と移動の意味（名古屋市立大学）

映画のなかのテレビ・メディア：昭和三十年
代の映像産業の攻防を通して（国際日本文化
研究センター）

「地域に資する映画」とは——地域創造と
映画の関係を考える（奈良県立大学）

全学共通科目における映画を用いた臨床心理
学教育の試み—「教える」ことから「洞察と
共感の喚起」への変革を目指して—（香川大
学）

映画『ビリギャル』を活用した大学職員の能力
開発に向けた集合研修（愛媛大学）



ご紹介している文献は、CiNii Articles（<https://ci.nii.ac.jp/>）から検索
し、各大学のウェブサイト（機関リポジトリ）等で全文を閲覧可能です。

座談会 「機関リポジトリはどこへ向かうのか？」

2005年に千葉大学が日本で初めての機関リポジトリを立ち上げてからすでに15年が経ちました。その後、国内の機関リポジトリ構築数は増加の一途をたどっています。また、その間にゴールドオープンアクセスやプレプリントサーバの拡大、オープンな出版プラットフォームの出現など、オープンアクセスはさまざまな広がりを見せてきました。では、その中で機関リポジトリはどこへ向かい、何を目指すのでしょうか？今回は若手のJPCOAR作業部会員5名（Aさん：進行役、Bさん、Cさん、Dさん、Eさん）に参加してもらい、機関リポジトリやオープンアクセスの現状、今後の行方などについて普段思っていることを率直に語っていただきました。

A： ご参加いただきありがとうございます。今日は「機関リポジトリはどこへ向かうのか」について、みなさんが普段思っていることを率直にお話しいただきたいと思います。どうぞよろしくお願いします。

（一同） よろしくをお願いします。

機関リポジトリによるグリーンOAの意義について

A： まず最初のテーマとして、既に出版された査読済学術雑誌論文を機関リポジトリで公開するグリーンOAの意義について、業務の中で感じることなどあるでしょうか？

E： 学術論文をリポジトリに登録する時に著者版を登録しているのですが、利用者には出版社版もちゃんと見てくださいと案内する必要があったり、教員から「いや、出版社版がみたいんだ」と言われたりすることがあります。

A： グリーンOAを進めているのに利用者のニーズに合致しないということでしょうか。

C： 私の大学では教員インタビューを年2回しています。「著者版の論文でも見られたら嬉しいか？」という質問に対する回答は教員によって違って、分野ごとに傾向がある感じでもない、という印象です。著者版でもOKという人たちに論文を届けられたらいいなあとは思いますが……。

A： そうですね。利用者のニーズや利用されやすいコンテンツが分かればグリーンOAの優先度も変わってくるのではないかと思います。他のみなさんは研究者に話を聞いたりしたことはありますか？

D： 修士の学生に著者版と出版社版の違いを説明した時に「本物じゃないってことですか？」と聞かれたことがあります。図書館関係者以外には説明が難しいですね。

B： 著者版は出版社版と内容はほぼ同じなので、質的には担保できると思うのですが、なぜ両方の版が混在しているのかを理解してもらうのは難しいと思います。

A： ゴールドOAではなく、グリーンOAを進めることにメリットがあると図書館外の方に伝えるのは難しいですね。

D： 以前に図書館関係のフォーラムで「OAが始まった頃は誰もゴールドOAが主流になると思わなかったが、現在はグリーンOAよりもゴールドOAが主流になっている」と聞きました。そのような状況で出版されている論文の著者版を頑張って登録するのが良いのかよく分からないなと思います。それよりも、日本のリポジトリは紀要論文などのゴールドではOAにできない灰色文献を収集するほうがよいのではないかと考えています。

E： 私もその意見に賛成です。機関リポジトリに求められているのは紀要論文という印象ですね。他の担当者とも学内の固有のコンテンツの充実に力を注いだほうが

いいのではないかと話しています。

C: 学内にはリポジトリを発行プラットフォームにしている紀要もあります。ただ、学術雑誌論文の登録希望もあり、紀要論文だけをメインとすることも難しいので、私はできれば両方やりたいですね。

A: 登録希望者の傾向はありますか？

C: 自ら登録を希望されるのは人文系が多く、こちらから登録を依頼した時に反応がよいのは医学系が多いです。

E: どちらかというとなんて系ですかね。医学系は反応がないことも多いです。

C: 医学系では全世界で共通の課題について経済的な理由で論文にアクセスできないことがあってはならない、と言われたことがあります。医学系はOAに対する意識が高いのかなあと感じました。

A: それでは、どのように研究者にグリーンOAを訴えていけばよいのでしょうか？

D: ゴールドOAの代替としてのグリーンOAや出版社版の代替としての著者版、という考え方はリポジトリの生存戦略としては上手ではなく、結局、資本で殴られ続けて終わるだけなのではないかという気がしています。それよりオリジナルコンテンツをプッシュしていく方がよいのではないかなと、みなさんの話を聞いて思ったところで。志が低いかなという懸念もなくはないですが……。

A: それは志が低いことなのですか？

D: 査読論文はこちらから積極的に収集しないことになるので、それはそれでツッコミどころはあるのかなあと。

A: それは、査読されて質が担保された論文の登録はあきらめるということですか？

D: いや、ゴールドOAで出版されるものは、ゴールドOAでやらしてもらえばいいじゃないかと。もっというとILLやPay per Viewなどで読める論文を頑張ってリポジトリで公開するよりも、灰色文献のような機関リポジトリで公開しないと消えてしまうものを漏らさずに収集する方がユニークなプラットフォームになるのではないかなと思っ

ています。ただ、機関リポジトリがスタートした当初の理念的な土台である、出版社に対抗するモデルとしてのリポジトリを期待されていることも多いので、そのような人たちに怒られそうかなと思います（笑）。

C: そもそも、この情報化社会で情報がネットにないものって、世の中に必要とされているんだろうかとも思います。存在すら知られていないものをリポジトリから公開したところで、実際にそれが使われるのかという疑問はあります。ただ、保存目的でリポジトリに登録することはありかなとも思います。

A: 事業を継続するためには図書館外の方に意義を説明し納得していただく必要があります。ダウンロード数とか引用数とか、数字で結果が出ないと、リポジトリを含め事業を続けられない苦悩を感じています。だから使われるコンテンツを登録したい、という気持ちもよく分かります。

C: 図書館職員からするとどれが価値のあるものかわからないのでダウンロード数などの数値に頼ってしまっていますが、実際に使う教員からすると、この資料はこの分野ではよく使われる、ここにしかない資料だということがあったりして。だけど、研究者数が少ないのでダウンロード数としては少なくなってしまうため、そのあたりの評価が難しいなと思います。

B: リポジトリを作った時と現在では目的や需要が変わったのではないかと思います。じゃあ、現在の需要を正しく把握できているのかというと、自分の大学を考えてもあまり自信がないですね。需要を考えると、リポジトリでしか入手できないコンテンツは意義があるかなと思います。一方で大学の研究成果として公開したいということもあります。ただ、ゴールドOAになっていたり、学術雑誌論文は他の大学と重複していたりしているので、ちょっとねじれているなと思います。やはり、リソースは限られているので、どこに注力するのか、紀要なのか、査読済み論文なのか、オリジナルコンテンツなのかは需要の把握と一緒に考える必要がありますね。また、日本全体で、ゴールドOAを中心とするのか、グリーンOAを中心にするのかといった流れは意識しておく必要があると思います。

機関リポジトリをとりまく様々なトピックス

A: それでは次のテーマに移ります。機関リポジトリをとりまく様々なトピックスについて、皆様のご意見や現状を話していただけないでしょうか？

C: 教員にインタビューをしたら、リポジトリに研究データを登録できることを知りませんでした。その時に研究データも登録できると説明したのですが、**研究データは容量が大きいこともあるので、リポジトリのストレージを考えると積極的に広報するのは難しいな**と思っています。

E: うちでも研究データの登録について問い合わせがあって、ちょっと怖いと思いました。最初はデータリポジトリを案内したのですが、機関リポジトリを希望されたので、登録を行いました。その際にライセンスをどうしようかと迷って、公開範囲の設定など分からないところも多いので、積極的な広報はためらいますね。

B: うちも大々的には広報していませんが、論文投稿時に研究データのパーマネントリンクが必要な場合があるため、希望者の研究データは登録しています。研究データはファイルサイズが大きいので、リポジトリでは容量が足りなくなって困るということがありますね。ただ、論文と研究データが紐づくのは重要だと思います。実験等の再現性が担保されることは科学論文にとって基本的で重要なことだと思います。海外の例だと機関リポジトリとデータリポジトリの両方を持っていて、論文と研究データの相互リンクをしているところもあります。

D: 研究データの問い合わせはありますが、今のところ登録はしていません。次期JAIRO Cloudへの移行が完了して落ち着いたら考えよう、ということになっています。研究データも含めて、登録コンテンツのDOIは気になっています。博士論文と紀要論文には付与していますが、研究データに付与するかどうか、他の機関の対応が気になっています。

C: うちの大学ではDOIは紀要論文の一部のみに付与しています。リポジトリに登録した研究データのアドレスが必要な場合はDOIではなくてURLを伝えました。もし、論文と研究データを紐づけて長期的に運用する場合は困るなと思っています。**今後システムリプレイスを予**

定していて、それによってURLが変わってリンク切れが多く発生してしまうので、永続識別子の大切さをかみしめています（笑）。

C: 関連して研究者の識別子も気になっています。現在はリポジトリでORCIDを扱っていないですし、学内教員のORCID取得状況も把握できていない状況です。researchmapもどう扱ったらいいのか悩ましく思っています。みなさんはどうでしょうか？

D: 業績データベースなどと連携しろと言われることもあります。別部署が管理しているから難しいなというところがあります。**教員からすると、リポジトリに登録すると業績データベースに反映されてほしいと思うでしょうし、大学にORCID IDを渡せば、学内システムが連携して自動で登録されるのが自然だと思うでしょうね。**もし、すべて図書館が管理するシステムだったら頑張ればなんとかかなるかもしれないのですが……。

E: うちの大学は連携してません。別の部署なので協力が必要だけど、そういった動きがない状況です。学内でORCIDを導入しようという話もあったのですが、現在は下火になっています。広報の部署とは研究業績の公開で、学務系の部署とはハゲタカジャーナル関連で少し連携していたこともありましたが、**機関リポジトリは大学全体で運営するものなのに、図書館でやっているだけで、全体には浸透していない中で、どうやって連携していこうかなというのは悩みどころです。**

D: 教務との連携だと、博士論文等の公開での連携はあります。学位規則改正の時のしくみづくりの際は熱心だったけど、一度ルーティン化してしまうと以前のような協力関係は薄れてくるように思います。

C: 数年前に業績データベースのresearchmap対応で関連部署が参加するWGが立ち上がったのですが、実際はあまり開かれませんでした。結果として、教員にresearchmapにデータを入力してもらい、そのデータを流用して業績データベースから公開しています。業績データベースにリポジトリへのリンクを貼らせてほしいという要望をしているのですが、いまだにできていません。システム的には連携していないのですが、researchmapに登録した論文データをもらって、教員へリポジトリへの登録依頼をしています。

B: URAと仲が良かったのに、コロナの影響でなし崩し的に交流がなくなってしまいました。IR (Institutional Research)室もお互いにやり取りはあったのだけど、ORCIDの学内取得率を調べるところくらいで終わった感じです。

D: 関係部署にはリポジトリが何かは分かっていますが、リポジトリに何が求められているかは自分たちも含めてよく分かっていないなあと感じます。大学としてリポジトリをどうしたいのか。導入から長いため業務のルーティンではできあがっており、継続するだけなら問題はないのですが、戦略的にどうすべきなのかは考えないといけないと思っています。図書館がそれを決めるのか、大学が決めるのか……。

B: アインシュタインの言葉に「手段は完璧になったが、目的がよく分からなくなったのが今の時代の特徴です」というのがあるのですが、今のリポジトリはそんな感じがします。私はリポジトリの方向性を決めるのは図書館や大学ではなく研究者自身なのではないかと思っています。使う人がこういうものが欲しいと言って、それを図書館などが実現していく形なのかなと思います。

A: 査読やオープンピアレビューについてはどうでしょうか？

D: 査読はその仕組みが研究不正の温床になっているのではないかなど、色々な問題があると指摘されています。その対策としてオープンピアレビューと査読を業績にするという試みがあり、Publonsというサービスでも行われています。私は機関リポジトリが論文の最初のプラットフォームになるという未来もあると思っています、その場合に査読をどうするか、質をどう担保するか、リポジトリが査読機能を持つべきかどうか気になっています。さらに言うと、リポジトリで出版されたコンテンツに査読コメントや査読者を紐づけるべきかについても気になります。

C: ある教員から出版されてないけど登録したいと言われることはたまにあります。うちの方針では教員を信頼して登録することにしているのですが、大丈夫かなと思うこともあります。唯一の公開場所がリポジトリなので、ちょっと不安に思うこともあります。

D: そういう場合にどうするかですね。リポジトリが査読機能を持つのは難しいので……。担当者の裁量で判断するのが難しければガイドラインなどでしくみ化するしかないかなと思います。他の方は、このような時はどうされていますか？

E: うちの大学では、そういう話は聞かないのですが、同じ対応になると思います。

D: 自分が担当者ならちょっと怖いかなと思います。

C: うちの場合は、通常の出版済みの論文と同様の流れでそのまま登録した感じです。

A: 教員からの依頼があれば、そのまま制限なくリポジトリに登録するのですか？

D: どの大学でも規約があるので、それによると思います。

B: 個人的にはリポジトリでの査読までもはしなくていいのかなと思います。査読情報の紐付けは分野によって色々で、OKだよという人もいれば、命にかかわるからやめてほしいという人もいます。査読者は時に厳しいことを言わないといけないこともあるので、ブラインドでやるならブラインドのままがいいなと思います。一方で面白いと思うのはオープンピアレビューを採用しているジャーナルで、最初から投稿者と査読者がオープンになるので、それならよいのかなと思います。

A: プレプリントサーバについてはどうですか？

E: medRxivの話ですが、先日講習会でOAについて講義する機会があり、そこでmedRxivを紹介したら反応がそこそこよかったです。プレプリントサーバは図書館関係者には話題になっていますが、学内の学生や研究者がどれくらい使っているのかは分かっていなくて、学生に情報を入手するソースとして紹介したほうがいいのか悩んでいます。

A: みなさんの大学でプレプリントを機関リポジトリに登録されていますか？

B: 登録していません。プレプリントを載せたいという問い合わせはありますが、規則上は一度はどこかで公開していることが必要なので断っています。

D： おそらく登録していないです。

E： 登録していないと思います。

C： 数件登録があり、arXivにも登録されています。

A： ほかに気になる話題はありますか？

D： データリポジトリについてももう少し話したいのですが。研究データを登録する時に、機関リポジトリに研究データも登録するのが既定路線になっていますが、データ専用のリポジトリを作らなくてもいいのだろうかと思っています。容量、公開範囲の制限の話もあって、機関リポジトリとデータリポジトリに求められる要件は違う気がしているのですが、そのあたりガイドラインなどがありますか？

C： 私の大学では論文のエビデンスデータに限らなくても割と無条件に登録しています。あるデータセットは数十万件ものデータがあり、独立したデータベースを作っているのですが、データの持ち方やシステムプレイス時にどうするかということもあり、なかなか難しいです。

D： 研究データを公開するのは機関リポジトリというのは正解だろうか？と疑問に思っていて、専用のリポジトリやデータベースが必要ではないかとずっと思っています。自分はそうは思わないのだけど、図書館内では研究データの登録はもはや図書館の仕事ではないとよく言われます。みなさんのところはどうか？

E： 研究データのワークショップに去年参加してアメリカのライブラリアンの方に実際の仕事を教えてもらいました。研究データ自体の整形やメタデータの入力などだけではなく、データマネジメントなどの話もあり、実際に図書館では無理だなと思いました。データライブラリアンと言われるような仕事を図書館でできるのか、機関リポジトリで研究データをやることにすると図書館の仕事になってしまうけど、そのまま進めていいのかなと不安に思いました。

C： 図書館の仕事なの？と言われたことはないのですが、研究データとデジタルアーカイブの違いはなんだろうとは思っています。デジタルアーカイブは貴重書のデジタル化画像だけでなく、教員による翻刻や解説、分類といった研究活動の成果も含まれていて、研究データとも言えます。

そうであれば、図書館は以前から研究データに関わってきたと言えるのではないか、研究データ全体が図書館の仕事にふさわしくないとは言えないのではないかと思います。

D： データの加工や整形まで求められると図書館の仕事ではないのではないかと思います。データリポジトリをやりたいという時に図書館に何が求められているのかを我々が分かっていないし、あるいは、誰もわかってないのではないかということが問題の根本にある気がしています。データを入れるハコを運用するだけなら図書館でやればいいと思うのですが。例えば、上層部の会議でデータリポジトリをやることが決まったとして、上層部の人それぞれがイメージするデータリポジトリは一致していないのではないかと考えていて、そうすると図書館から提案していく必要があるのかなとも思っています。

A： 研究データの担当部署になって苦しんでいます。公開できるもの、しているものは図書館で扱っていますが、公開していないデータの管理をやっているのか、という疑問もあります。でもやれって言われたからやるしかない状況ですね。

図書館/機関リポジトリは何を目指すのか

A： それでは図書館やリポジトリが何をを目指すのかについてお話いただければと思います。

E： どこにもPDFで公開されていない成果、例えば紀要論文の公開作業自体はルーティンのなかに組み込んでいけると思いますが、果たしてそれだけでよいのかと疑問に思いつつも、どうしたらいいのでしょうか。リソース配分については、リポジトリ担当者は兼任が多いので、その中でどれだけのことができるんだろう、どうしたらいいのだろうかと考えています。

D： リポジトリのことだけを考えるならやれることはなんでもやるという方向がいいに決まっていると思います。ただ、おそらくそれは無理で、リポジトリのために図書館のトラディショナルな仕事の何割を削減できるのかを考えると相当難しいのではないかと思います。だから、リポジトリに割り振られたリソースを使って何とかリッチにやっていくしかないのではないかと、そのためにはリポジトリの方向性を決めることが必要だと思っています。

図書館の働き方についてたまに話題になるのですが、図書館の人は私も含めて仕事が増えた分、他を減らすことが上手ではないという気がしています。最近これはもう無理なんだろうと諦めています。そうであれば、リポジトリがハッピーになることが図書館全体がハッピーになることとイコールではないかもしれないとも思ったりします。

C: 結論は出ていないのですが、もし機関リポジトリとしてリソースがあったとしても、紀要やゴールドOA、グリーンOA、研究データなどすべてをやるのが理想かという点と違うのではないかと思います。

E: 以前に教授会でコンテンツ登録のお願いをしたら、グリーンOAについて「不完全なものを自分の成果として公開するってことだね。それなら出版社版の方がいいからグリーンOAはしたくない」と言われて、研究者はOAにしたいのかな、してもらうのが本当に良いことなのかなと疑問に感じる時がありました。

A: リソースが限られている状況で何ができるのか？あるいは単純にこれからしたいことはありますか？

C: 機関リポジトリがどうあるべきかとは違うと思うのですが、先生からこれを公開してほしいと言われて、登録をして、ありがとうって言われたらうれしいですね。あるいは、これがリポジトリにあってよかったと言われるとうれしいです。研究者が公開したいけど、どこにも公開できない時に、リポジトリで公開して下さいとなればいいなと思います。単純に研究者に喜ばれるとうれしいです。

E: 私も同じ意見で、図書館では管理系の業務は利用者に感謝されることがないけど、サービス系の仕事は利用者から感謝されることがあります。リポジトリはダウンロード数は見えるけど、それが研究者の役に立っているという実感はなくて、OAにして感謝されることがあれば、それがモチベーションにつながっていると思います。

B: 考えさせられる問題ですね。現場レベルでは意義のある仕事をして感謝されたいと思いますが、それには色々なスケール感があると思います。科学に貢献していると思うとか、特定の利用者にありがとうと言われるとか。私はこれを公開することで誰かが次の新しいことを発見したり、生み出したりすることがうれしいなと思います。

漠然と科学に貢献していることで自分は満足してしまします。海外の某研究機関に行った時、一番感銘を受けたことが、庶務担当の職員が庶務の仕事だけでなく、訪問してきた小中学生のツアーを科学者と同じようにして「なぜそんなことしてるの？」と聞いたら、「科学に貢献するための仕事なのよ。理解してもらうための」と。自分にとっての機関リポジトリも同じで何かに貢献するものと思っています。リポジトリについては、**需要が何かを把握しないといけない、研究者に当事者意識を持ってもらわないといけない、そうしないと何も変わらないと思います。**海外では、図書館員はguideをする、研究者はdecideをする、と言われており、図書館員は案内をして、研究者が決めるというスタンスも1つのやり方かなと思います。研究者は分野のコミュニティに属しているという意識が強いので、そのコミュニティに向けて図書館が話をするのが研究者にいちばん当事者意識を持ってもらえると思います。例えば、OAやオープンサイエンスが活発な地球惑星分野の学会での議論に図書館の人が入ったりして。研究者の視点を知ることができるし、図書館の事情を伝えたりして、波紋を広げていけたらいいのかなと思います。個人レベルで動くことは難しいかもしれませんが、**コンタクトを取っていくと物事が動いて、研究者の需要も見えてくるのかなあと。同時に、研究者は当事者意識を持たないといけないと思います。**その時に査読の問題はリポジトリを含めて本質的なことで、査読を大学の活動の核だにとらえると、論文の査読に限らず、試験の採点なども広義の査読ではないかと思っています。それらを教育活動の業績として認めるということも必要かなと思います。そのように考えると、図書館は案内をするところまででいいのかなと思っています。ただ、その時に研究者にも当事者として動いてもらうことが必要だし、研究者にコンタクトを取っていくことが必要ではないかと思います。そのようなことをして初めてリポジトリの需要が分かってきて、リポジトリが何を目指すのかが見えてくるのではないかと思います。

A: 確かに小さくてもいいので、研究者と対話を始めることが大事だなと思いました。

A: そろそろ時間になりましたのでこのあたりで座談会を終了します。みなさん、ありがとうございました。

(一同) ありがとうございました。

JPCOARからのお知らせ

Webサイトの統合について

JAIR Cloudコミュニティサイト・IRPCのWebサイトを2021年1月14日に閉鎖しました。それに伴い、両サイトの主要なコンテンツはJPCOAR Webサイトに統合しています。

JAIR Cloudの運用マニュアルやJAIR Cloudコミュニティサイト掲示板の投稿は、JPCOAR WebサイトのWEKOからダウンロード可能です。また、両サイトのバックアップは取っていますので、なにか必要なコンテンツが出てきましたらJPCOAR コミュニティ強化・支援作業部会までお問い合わせください。

なお、JPCOAR WebサイトもWEKO2で運用を行っていますが、2021年3月にWEKO3へ移行を行う予定です。



メーリングリストのリリースについて

JPCOARでは2020年12月から2つのメーリングリスト(ML)の運用を始めました。

1つは、**JPCOAR Community ML**という名称で、オープンアクセスやオープンサイエンスに関わるトピックをあつかうものです。リポジトリ実務でのお悩み、海外の動向、イベント情報の共有など、お気軽に活用ください。

もう1つは、**JPCOAR JAIR Cloud Community ML**です。こちらはJAIR Cloudコミュニティサイトの掲示板機能にかわるものです。JAIR Cloudにまつわるご相談やご質問はこちらで共有ください。

JAIR Cloudの運用は、会員機関の相互扶助によって成り立っていますので、掲示板に引き続きご協力をお願いします。MLの運用方針や参加の方法は、JPCOAR Webサイトより詳細をご覧ください。

みなさまのご参加お待ちしております！



編集後記

今年度もCoCOARをご愛読いただき、ありがとうございました。CoCOARの記事がOAやIRについて考えるきっかけになれば、とてもうれしいです。(上田)

今号もお読みいただきありがとうございました。メーリングリストも開始しましたので、ぜひご登録の上ご活用ください！皆様と話題を共有できれば幸いです。(山田)

2020年度から作業部会に参加いたしました。これからもCoCOARやホームページなどを通して、ホットな話題を伝えられるように頑張っていきたいです。(植山)

Webサイト: <https://jpcoar.repo.nii.ac.jp/>

Facebook: <https://www.facebook.com/jpcoar/>

Twitter: <https://twitter.com/jpcoar/>



JPCOAR Newsletter: CoCOAR 第12号

2021年2月22日 発行

オープンアクセスリポジトリ推進協会

